

むかしが始まるよ。こんばんは、みなの人々！

昔、あるところに、子どものいない夫婦がありました。ふたりは、毎日、神さまに、子どもをお授けくださいと祈っていました。

ある朝、おかみさんは、窓ぎわに立って、太陽の神に向かっていいました。

「おてんとうさま、ヘーリオスさま。どうか子どもをおめぐみください。その子が十二歳になったら、また連れ帰ってください。けっこうですから」

やがて、おかみさんは、女の子を生みました。明けの明星のようにきれいな子でした。女の子は、マルーラと名づけられました。マルーラは大きくなるにつれて、ますます美しくなりました。

マルーラが十二歳になったある日のことです。マルーラが泉に水くみに行くと、太陽の神ヘーリオスが、若者にすがたを変えて、近寄って来ました。そして、

「おまえの母親に、約束したものを、いつくれるのかときいておいで」といいました。

マルーラは、

「あなたはいつたい、どなた？」とききました。

「おまえは、母親にそういえばいいんだ。母親は、わたしがだれなのか知っているよ」

「いいわ、そうするわ」

マルーラは、家に帰ると、母親にいいました。

「お母さん、さつき泉で、若い人が話しかけてきたの。その人ったら、とてもきれいな人で、お日さまのようにかがやいてるの。その人がね、お母さんに、約束したものをいつくれるのかきいて来いって」

母親は、

「そうかい、その若い人なら知ってるよ。また会ったら、わたしに伝えるのをわすれたっていいなさい」といいました。

あくる日、マルーラがまた泉に行くと、ヘーリオスがやって来て、

「わたしがたのんだことをいつてくれたかね」とききました。マルーラは、

「わすれてしまいました」と答えました。すると、ヘーリオスは、金のりんごをくれていいました。

「このりんごをお持ち。服の下に入れておくんだ。夜寝る前に、母親がおまえの服をぬがせるとき、りんごが落ちるだろう。そうすれば、母親にいうのを思い出すだろう」

マルーラは、金のりんごをもらって、幸せそうに家に帰りました。

「また、あの若い人に会ったのよ。その人、このりんごをくれて、服の下に入れておきなさい、お母さんが服をぬがせるとき、りんごが落ちて、お母さんというのを思い出すだろうからって」

母親は、

「その人がそれを見つけたら、取ればいいっていいなさい」といいました。そして、二

度とマルーラを泉にやるまいと決めました。

それからは何事も起こらなかったで、母親は、そのうち、思い切ってマルーラを泉に水くみに行かせました。ところが、ヘーリオスは、マルーラを見るとすぐに近づいて来ました。

「わたしがたのんだことをいつてくれたかね」

「ええ、お母さんは、あなたがそれを見つけたら、取ればいいっていつてたわ」

ヘーリオスは、マルーラの手を取って、はるかな太陽の城に連れ去りました。

ヘーリオスは、昼間は一日じゅうずっと出かけていて、夕方になると城にもどって来ました。マルーラは、何ひとつ不自由しませんでした。けれども、しじゅう母親を思い出しては、美しい庭にすわって泣いていました。

「お母さんの心はどんなに凍り、しおれていることでしょう

ヘーリオスの庭だって、凍り、しおれるといいんだわ

折れなさい、木よ。折れなさい」

マルーラは、そういつて、両手でほおをかきむしりました。すると、庭の草はしおれ、木は折れました。

夕方、ヘーリオスは帰って来て、マルーラが目を泣きはらし、ほおを傷だらけにしているのを見ました。

「かわいいマルーラ、だれがおまえにそんなことをしたんだね」と、ヘーリオスは、きました。

「となりのお婆さんのおんどりが来て、うちのおんどりとけんかしたんです。それを止めようとして、こんな目にあつたの」と、マルーラは答えました。

あくる日、マルーラは、また庭にすわって、ほおをかきむしって泣きました。

「お母さんの心はどんなに凍り、しおれていることでしょう

ヘーリオスの庭だって、凍り、しおれるといいんだわ

折れなさい、木よ。折れなさい」

すると、草はしおれ、木は折れました。

夕方、ヘーリオスが帰って来てきました。

「かわいいマルーラ、だれがおまえにそんなことをしたんだね」

「となりのお婆さんのねこが来て、うちのねことけんかしたんです。それを止めようとして、こんな目にあつたの」

あくる日、マルーラは、また庭にすわって、ほおをかきむしって泣きました。ほおは血だらけになりました。

「お母さんの心はどんなに凍り、しおれていることでしょう

ヘーリオスの庭だって、凍り、しおれるといいんだわ

折れなさい、木よ。折れなさい」

すると、草はしおれ、木は折れました。

夕方、ヘーリオスが帰って来てきました。

「かわいいマルーラ、だれがおまえにそんなことをしたんだね」

「ばらのしげみの側を通ったんです。そしたら、ばらが、とげでわたしをひっかいたの」
あくる朝、ヘーリオスは、

「きょうは出かけないで、マルーラが何をしているのか見てみよう」と考えました。ヘーリオスが庭に出てみると、マルーラが、ほおをかきむしって泣いていました。

「かわいいマルーラ、どうして泣いているのだ。ここにるのが恐いのかい」

「いいえ、恐くなんかないわ」

「それなら、どうして泣いているのだ。母親の所に帰りたいのかい」

「ええ、お母さんの所に帰りたいの」

ヘーリオスは、

「よし。では、おまえを母親の所に送ってやろう」といって、マルーラの手を取り、庭のはずれに行きました。そして、大きな声で呼びました。

「かわいい獅子たち、かわいい獅子たちよ」

すると、獅子たちが飛ぶようにやって来ました。

「何のご用でしょう、ご主人さま」

「おまえたちで、マルーラを母親の所に連れて行ってくれるかね」

「承知しました」

「ところで、とちゅうでお腹がすいたらおまえたちは何を食いたい？ のどがかわいたら、何を飲みたい？」

「マルーラの肉を食べ、マルーラの血を飲みたいです」

ヘーリオスは、

「では、この仕事はおまえたちには向いていない」といって、獅子たちを追い返しました。そして、また、大きな声で呼びました。

「かわいいきつねたち、かわいいきつねたちよ」

すると、きつねたちが、飛ぶようにやって来ました。

「何のご用でしょう、ご主人さま」

「おまえたちで、マルーラを母親の所に連れて行ってくれるかね」

「承知しました」

「ところで、とちゅうでお腹がすいたらおまえたちは何を食いたい？ のどがかわいたら、何を飲みたい？」

「マルーラの肉を食べ、マルーラの血を飲みたいです」

ヘーリオスは、

「では、この仕事はおまえたちには向いていない」といって、きつねたちを追い返しました。そして、また、大きな声で呼びました。

「かわいいしかたち、かわいいしかたちよ」

すると、しかたちが飛ぶようにやって来ました。

「何のご用でしょう、ご主人さま」

「おまえたちで、マルーラを母親の所に連れて行ってくれるかね」

「承知しました」

「ところで、とちゅうでお腹がすいたらおまえたちは何を食いたい？ のどがかわいたら、何を飲みたい？」

「新しい草と、きれいな水です」

ヘーリオスは、

「おまえたちに、わたしのめぐみがあるように」といつて、マルーラを、一頭のしかの角の上にすわらせました。そして、マルーラの服に、金貨をぬいつけました。

しかたちは、マルーラを乗せて、走りに走りました。

やがて、しかたちはお腹がすいてきました。そこで、糸杉を見つけて、

「傾け、糸杉。おまえの上にマルーラをすわらせるために」といいました。すると、糸杉が傾いたので、しかたちは、マルーラを枝の上にすわらせました。そして、

「わたしたちは、むこうに行つて少し草を食いたいんだ」といいました。

「分かったわ。行つてらっしゃい」と、マルーラはいいました。

さて、糸杉の下に、井戸がありました。その近くに、魔女が、三人の娘たちと住んでいました。

魔女は、娘のひとりに、井戸へ水くみにやりました。

娘は井戸におけを下ろそうとして、水に美しい顔がうつっているのを見ました。娘は、それが自分の顔だと思つて、おけを放りだして、小おどりしながら家に走つて帰りました。魔女が、

「水をくんで来たかい」ときくと、娘は、

「わたしみたいなきれいな子を、水くみになんか、行かせていいの？」といいました。

魔女はわけが分からなくて、二番目の娘を井戸にやりました。ところが、この娘も、水にうつった美しい顔を見て、おけをけ飛ばして、家に帰つて来ました。

魔女は三番目の娘を井戸にやりました。この娘も、水にうつった美しい顔を見て、おけをけ飛ばして、小おどりしながら家に帰つて来ました。

そこで、こんどは、魔女が井戸に行きました。そして、水に美しい顔がうつっているのを見て、上を見上げました。すると、糸杉の枝で、マルーラがお腹をよじつて笑つていました。魔女は、

「はああ、おまえだね。うちの娘が水を見て夢中になったのは。おかげで、わたしや、パン作りの粉をだいなしにされちゃったよ。下りといで、食つてやるから」といいました。マルーラは、

「それより、帰つて粉をこねなさいよ。それがすんだらもどつて来て、わたしを食べればいいじゃない」といいました。

魔女は水をくんで走つて帰り、急いで粉をこねて、もどつて来ました。

「さあ、粉をこねたよ。下りといで、食つてやるから」

「それより、帰つてパンを丸めなさいよ。それがすんだらもどつて来て、わたしを食べ

ればいいじゃない」

魔女は、走って帰って、パンを丸めてもどって来ました。

「さあ、パンを丸めたよ。下りといで、食ってやるから」

「それより、帰ってパン焼きがまをそうじしなさいよ。それがすんだらもどって来て、わたしを食べればいいじゃない」

魔女は走って帰って、パン焼きがまをそうじしてもどって来ました。

「さあ、そうじしたよ。下りといで、食ってやるから」

「それより、パンを焼きなさいよ。それがすんだらもどって来て、わたしを食べればいいじゃない」

魔女は、パンを焼きに、走って帰りました。そこで、マルーラは、

「しかさーん、しかさーん」とさげびました。しかたが急いでもどって来ました。マルーラは、

「魔女がここに来て、わたしを食べようとしているの」といいました。しかは、

「傾け、糸杉。マルーラをまた乗せられるように」といいました。糸杉が傾いたので、しかはマルーラを枝から下ろし、背中に乗せて走り出しました。

走って行くうちゅうで、小ねずみに会いました。しかは、

「小ねずみ、もしも魔女に会って、わたしたちを見たかと聞かれたら、何か引き止めるような話をしておくれ」とたのみました。そして、また走って行きました。

じきに、魔女がやって来て、小ねずみにききました。

「おい、小ねずみ。しかに乗った女の子を見なかったかい」

すると、小ねずみは、

「羊の毛の糸玉を見つけたよ」と答えました。魔女は、

「おまえは、わたしの話とちがうことをいつてるね。しかに乗った女の子を見なかったかといってるんだ」といいました。小ねずみは、

「それから、羊の毛をすいたんだよ」と答えました。

「おまえは、わたしの話とちがうことをいつてるね。しかに乗った女の子を見なかったかといってるんだ」

「それから、羊の毛をつむいだんだよ」

「おまえは、わたしの話とちがうことをいつてるね。しかに乗った女の子を見なかったかといってるんだ」

「しまいに、それを織って布にしたんだよ」

「おまえは、わたしの話とちがうことをいつてるね。しかに乗った女の子を見なかったかといってるんだ」

「見たよ。さあ、走れ！」

魔女は走りだしました。

しかは、マルーラの家のおすぐ側までやって来ました。後から、魔女が追いかけて来ます。すると、犬が、

「ワンワン。みんなごらんよ。マルーラが来る。マルーラが来る」とさげびました。けれども、母親は、

「しーっ、ひどい犬だね。マルーラは帰って来やしないのに。わたしは、悲しくて参ってしまふよ」といいました。

こんどは、屋根の上のねこがさげびました。

「ミヤウ、ミヤウ。みんなごらんよ。マルーラが来る」

けれども、母親は、

「しーっ、ひどいねこだね。わたしは、悲しくて参ってしまふよ」といいました。

そのとき、おんどりが、

「コケコッコー。みんなごらんよ。マルーラが来る」とさげびました。

「しーっ、ひどいおんどりだね。わたしは、悲しくて参ってしまふよ」

しかは、戸口から飛びこもうとしました。そのとき、魔女がしかのしっぽをつかみました。戸がボタンとしまつて、しっぽはちよん切れてしまいました。

「ああ、かわいそうなたしのしっぽ」と、しかはさげびました。魔女はしっぽを捨てて、がっかりして帰って行きました。

マルーラが帰って来たので、母親は、大よろこびでいいました。

「しかや、ほんとうにありがとう。マルーラを連れもどしてくれたから、あなたのしっぽをまた付けてあげましょう」

母親は、木綿糸でしっぽを付けてやりました。

マルーラは、ヘーリオスの金貨で、いい暮らしをしました。でも、わたしたちのほう
が、もつといいけどね。

原話…『世界の民話4 東欧』飯豊道男訳／ぎょうせい
再話…村上郁